

---

# 夏だ そう夏だ

ごはんライス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏だ そう夏だ

### 【コード】

N8895U

### 【作者名】

ごはんライス

### 【あらすじ】

下品なので15禁としました。夏なのに下品なの書いてしまった。これは暑苦しいなあ……。

「みーんみーんみーんみーん」

近所のおっさんが木にしがみつき、せみの真似をして鳴いている。

「うるさいな。やまもっさん」

オレは漫画を描きながら、舌打ちする。

扇風機が回る。

汗が垂れて、線が流れないように気をつけて描かないといけない。

夏だ。真正銘の夏だ。ごつつ夏だ。

ガリガリ君を食べつつ、こういう時は熱いものを食つと逆にいいかなあと思い、カレーライスでも作ることにした。

しかし、冷蔵庫を開けても材料が入ってない。悲しい低所得漫画家である。

「買い物に行くか……」

オレは誰に向かって話してるのかな。読者かな。そうかも。

もうひとつ考えた。河野のアパートへ行って、何か料理を作ってもらおうか。

河野つてのは女流漫画家である。近所に住んでいる。

「よし。河野のアパートへ行こう」

オレは、上半身裸だったので、Tシャツを着て、外に出た。

「みーんみーんみーんみーん」

おっさんがまだ鳴いている。

「うるさいー！」

オレはおっさんに向けて石を投げた。

すると見事に命中して木から落ちてきた。

「みーんみーん」

手ぶらで行くのも何だなと思って、オレは何か買っていくことにした。

「ガリガリ君を十個くらい買ってきてか」

オレは一人で歩きながら誰にしゃべってるのかな。読者かな。そうかも。

すると、うぜえことに、前から、いやなやつが歩いてきた。

「吉島」

「よう。亀田」

こいつは、オレの高校の時の同級生で、今は、宗教関係のことをしてる。

この前など、無理矢理高い壺を買わされた。吉島は兄貴がやくざなので断るとポッコポコにしたらうと言われ、仕方なしに買ったのである。

その壺は、何の役にも立たず、単なる小銭入れになってる。

低所得漫画家にとっちゃ鬼のような吉島。

オレは無視して、どんどん歩いていった。

「おい。無視すんなよ。おい。亀田」

暑い日にこんなうざいやつの相手なんかしたくない。

吉島は腹が立ったのか、アスファルトに転がってた石を拾い、オレに向かって投げてきた。

見事、命中。

「痛いな、ばかやろう!」

「お。そんな口叩いていいの。オレの兄ちゃん、やくざだぞ?」

くそ。忘れてた。

こんなちび、一発殴れば倒れるが、あとで暴力団が来るとなっっては、そういうこともできない。

暑い。汗が流れる。くそいまましい。

「河野のアパートに行くんだよ。急いでるんだよ。邪魔すんな」

「えっ河野」

しまった。これはいかん。

実は、河野も今は漫画家をしているが、高校の同級生である。

吉島は昔から河野のことが好きだったのだ。

「オレも行く」

「うるさい。お前はうざいから来るな」

「いいや。行く」

厄介なことになってきやがった。吉島はこういうやらしい男だから、連れていったら、きつと河野がいやな気分になる。河野は吉島を嫌っている。そうなれば、カレーライスを作ってもらえなくなるではないか。

「ついて来るな」

「お前がオレの前を歩いてるだけだろ」

やばい。こいつ、ほんまに河野のアパートまで来るつもりだ。

読者には説明してなかったが、河野は、けっこう優しい女である。どんな嫌いなやつでもそこそこ相手をしてしまう。そこも河野の魅力なんだが、逆にいえば弱点だ。こんな吉島みたいなクズは相手にする必要などない。

「帰れ」

「やだ。行く」

吉島は河野のアパートを知らないからオレについて来るしかない。河野が引越してから場所は内緒にしていたのだ。

「みーんみーんみーん」

暑い。本物のせみが電柱にとまって鳴いている。

「ガリガリ君買ってやるから帰れ」

「ガリガリ君？ やった」

「やるから帰れよ」

「もらっけど帰らん」

「!!!!!!」

何てわがままなやつだ。

オレはひとまずコンビニに入って、アイスコーナーでガリガリ君を十個くらいカゴに突っ込む。

吉島はエロ本コーナーでエロ本を立ち読みしてる。よし。今のうちにさっさと会計を済ませ、巻いてやるか。

カウンターにカゴを置いた。

すると、吉島がやってきて、カゴにエロ本を入れた。

「おいこら。てめえ。何すんだボケ」

「おい。亀田。よく見るよ」

吉島は、エロ本を指さした。

オレは、何だと思つて、エロ本を手にとる。

すると、何と表紙に河野が写つてゐるではないか。しかも、裸である。

「!!!!!!」

オレはこれはどういふことだと思つて、ケータイで河野に電話した。

「あつ亀ちゃん」

「河野! どういふことだよ。なんでエロ本に」

「てへっ。ばれちゃったかあ。あまりに低所得だから、つい、お小遣いがほしくて、モデルを引き受けちゃったのよねえ」

「何だよそれ!」

オレは店員がエロ本買うんですか買わないんですかと言つので、「買います!」と怒鳴つた。

コンビニを出て歩きながら、ガリガリ君をかじり、エロ本を眺める。いつの間にか、吉島も勝手にガリガリ君をかじつて、一緒になつて横からエロ本をのぞいてる。

「うわあ。河野のやつ、セックスしとるやんけ」

「くそう。あいつ、そういう女だったのか」

オレと吉島は興奮してきた。

ちよつと期待してたのだ。

「河野。けっこ胸あるな」

「着やせすんのな」

「たままない」

「みーんみーんみーん」

「さてと。あと十分くらいで、吉島と亀ちゃん来るね」

河野はその頃、黒い勝負パンツをはいていた。

「ふっふふ。3Pなんて、高校生のとき、部活の先輩たちに強姦されて以来だわ。楽しみね」

そう。河野もまた期待していたのだ。

まだまだホットになりそうだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8895u/>

---

夏だ そう夏だ

2011年7月16日03時30分発行